

Title	宣教師ナップと福澤諭吉
Sub Title	The missionary A. T. Knapp and Fukuzawa
Author	會田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1954
Jtitle	史学 Vol.27, No.2/3 (1954. 5) ,p.200(298)- 250(348)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾史研究特輯
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19540500-0200

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宣教師ナツプと福澤諭吉

まえがき

- 一、ナツプの來朝とユニテリアンの教義
 - 二、福澤の宗教觀とユニテリアン
 - 三、慶應義塾の大學部設置とナツプ
 - 四、ナツプの活躍及び福澤との親交
- むすび

まえがき

西哲アリストテレスは、その著書(「ニコマコス倫理學」)中にいつて、人間は社會的であつて、他の人々と共に生きるということの本性和してゐるとか。そういう難しいことを別としても、とにかく、およそこの世で交際の深く廣いは人生樂事の最上の一といつてよからう。近代日本の先覺福澤諭吉もそうした樂しみを樂しむことにおいて決して人後にお

會 田 倉 吉

ちぬ一人であつた。

傳記などをみても、福澤は身分の相違、職業の如何、年令の老若を問はず、實に多くの人々を迎えて親しみ、よくまた世話をやいている。まさに「千客萬來」である。しかも、それはたゞに國內のみに止まらず、外國人のうちにも多くの知己を持つていた。幕末維新のとき、逸早く洋學に志し、夙に西歐文化の移入につとめ、わが國の進運に大いなる貢獻をもたらした福澤にしてみれば、これもまた宜なるかなといえようか。そして、これから述べようとする宣教師アーサー・メイ・ナップ (Arthur May Knapp) との交遊もまたその一端を示すものである。

ナップはアメリカ、ユニテリアン派の宣教師で、明治中期日本に來朝、以後その派の宣傳布教につとめるかたわら、慶應義塾にも少なからぬ交渉を持ち、特に明治二十三年、義塾が私學最初の大學部を設置せんとするに際しては、新學制の樞軸をなしたとも思われる三名の外人教師 (ウィリアム・リスカム、ガレット・ドロップス、J. H. ウィグモア W. Liscomb; G. Droppers; J. H. Wigmore.) を斡旋した。その點では、義塾最初の外人教師 C. カロザス (Christopher Carrothers) が明治初年塾の學制改革につくしたのと共に注目される人である。カロザスについてはいずれ別に詳細を語る機會を得たいと思つてゐるが、こゝには、このナップについて福澤との關係を少しく記してみたい。

一、ナップの來朝とユニテリアンの教義

アメリカ、ユニテリアン協會 (the American Unitarian Association) の宣教師アーサー・メイ・ナップ (Arthur May Knapp) がはじめてわが國に來朝したのは明治二十年十二月二十一日である。そのことは同二十一年一月十五日

附「時事新報」雜報欄にみられる「福澤先生の晩餐會」と題する記事(この記事は石河幹明著「福澤諭吉傳」第四卷、六二―四頁にも全文引用されている。)に

米國ユニテリアン派の宣教師ナップ氏は同宗中に在りても道德智識の譽れを博せし温厚家にて豫て東洋漫遊を思い立ち去年十二月二十一日初めて本邦に到着せし事は其頃の諸新聞にも見えしが云々

と明記してあるのによつてわかる。また、明治二十年十二月二十四日附同紙雜報欄にはこうある。

ナップ氏 米國ユニテリアン宗派より宣教師として日本東京へ派遣されたる同國人ナップ氏夫婦は子息某米國婦人某と共に此程横濱入港の便船にて東京に來着したり

夫人、子息と他に一婦人を伴つていたわけである。子息はエー・テー・ナップといつて、後に慶應義塾の教職に就いたりしている(四節参照)。同行の婦人は後述のミッセス・チベット。乗船はアメリカの太平洋郵船ベルジック號であつたように思われる。同紙十二月二十三日附によると、二十一日に横濱へ入港した船は英國商船イスメラルド號とこれとの二船で、前者は神戸から廻航してきたもの、後者は十一月三十日サンフランシスコ解纜のものであるからだ。したがつて、そうとすれば、この記事からナップのアメリカ出立の日もわかり、海上不隱のため航海に二十一日と四十五分時を要したことが知られる。そして、明けて一月十三日には夫人、子息及びミッセス・チベットともども、恰も在京中のドクトル・シモンズを相客として福澤邸の晩餐會に招かれている。前掲「福澤諭吉傳」(第一卷、六四六頁及び第二卷、四七五―四八五頁)によれば、シモンズは明治三年五月福澤が腸チブスに罹つた際、へボンに代り横濱より來診して以來、福澤とは格別昵懇の間柄、明治二十二年その死にあつては福澤自ら筆をとつて三月一日附「時事新報」に追悼文を掲

けているほどの仲で、明治十五年一旦歸米したが、十九年末再度來朝して、居所の定まらぬまゝに、福澤はそのころ特に邸内に一屋を設け、そこにシモンズを住まわせんとさえしていた。

なお、右の十二月二十四日附記事にはナップ一行が東京に來着したとあるが、他方一月十五日附「福澤先生の晚餐會」記事中には「ナップ氏夫妻并に其子息同行ミセス・チベットの四人は（を）四時の急行列車にて横濱より迎へ云々」とあり、ナップはその後横濱にいたのである。福澤が明治中期米國留學中の二兒（長男一太郎、次男捨次郎）に與えた手紙百餘通を集めて編んだ「愛兒への手紙」がこの五月末公けにされたが、それによると、福澤は右兩兒を通じてナップには豫め深く好意をよせ、種々斡旋するところがあつて、その日本における住居についても少なからず心を配り、或は前以て三田小山町に一軒借家を探してこれを報じたりしているが、結局當人の所望が不明では獨斷で借宅の約束もならず、とりあえず横濱に借家して、ナップ等はそこに一時落着いていたものらしい（同書、書翰九一、九四、九七等參照）。それから、同書には、ナップの横濱入船予定は十二月十八日であつたのがおくれて、心待ちの福澤から同十九日附で、或は「今日ならん」かと一太郎宛に申送つている書翰（九二、追書）もみられる。また、餘儀ながら、前年來朝の上記シモンズを福澤邸内に住まわせる云々のことも、同じく同書（書翰六一、六三、九一、九九等）にうかがわれ、シモンズは明治二十一年二月中旬その新築の家に移り住んでいる。

さて、一月十三日の招待晚餐會に話を戻すが、明治二十一年一月六日附一太郎宛福澤書翰（前掲書、書翰九四）に夫れは扭置、今日ドクトルまで申して、日本流の馳走を致す積にて案内致し置候。何れ兩三日中には愉快に一席を催す積りなり。（同書、一九八頁）

とみえ、これを以てすれば、福澤は一月六日シモンズを通じて日本流の馳走をするためナップ等を招待していることがわかる。しかも、この招宴がいかに胸襟をひらいた和やかな會合であつたかは、最初に一言した一月十五日附「時事新報」記事がこまごまと報じているところだ。

ナップ氏は去に臨みその款待の厚きを謝し且謂ふ今夕の此清會は必ず故國の知人に細報して其樂を頌つ可ししかし余が筆に訴ふれば如何に省略するも二十ページの長きに亘るも其實況を寫すに難しと笑ひ戯れて去りたりと云へり
とある。ナップの感謝のほどがうかゞえよう。

ところで、福澤がこうして、はじめて來朝したナップを款待したのは何故か。「福澤諭吉傳」はいう。

先生(福澤)は令息一太郎が米國留學中其家に寄寓してゐた緣故からナップの派遣を歓迎し、其教義に關する論文を「時事新報」に紹介する等、同人のために種々の便宜を與えられた。(同書第四卷、六二頁)

と。因みに右の新聞というのは明治二十年十二月十六日附で、その雜報欄(五頁)に「米國來信」と題し、ボストンにおけるナップ送別會の盛況を報じた十一月九日附社友某の書信を紹介、并せて郵送されてきたボストン新聞所載の同席でのユニテリアン宗の會長ジョージ・ヘールやナップ自身及び特に同會から依頼をうけて立つた福澤捨次郎の演說等を譯出して掲げているものをさすのであらう。それによると、ナップの送別會が十一月六日午後七時からボストン府セロンド チョーチでかなり盛大に行われたことなども知られる。

つまり福澤は子息を通じて豫めナップを知つていた。そのため、福澤が相見るまえから夙にナップに好意をよせ、種々斡旋していたことは既に前にも記した通りで、再び前掲一月十五日附「時事新報」記事を引用すれば、

同氏（ナップ）は日本の國風民俗を知悉して國の土産になさんとは豫ての素望なれども何分にも知人稀なる千里の旅寢に東道の主人となる可き親友なく心細き想ある折柄幸ひにも福澤先生の令息とは米國にて相識の人なりかたぐに
て先生も傾蓋舊の如くに思ひ知縁を以て先づナップ氏を自宅に延き云々

というわけだ。その子息というのも、もちろん獨り一太郎のみならず、やはりアメリカ遊學中であつた捨次郎も同じく然りて、明治二十年十二月十九日附の次男捨次郎宛書翰（「續福澤全集」第六卷、六四八―九頁、「福澤諭吉傳」第四卷、四六三―四頁、及び「愛兒への手紙」書翰九三、一九六―七頁所收）には、ナップがアメリカを發つとき送別會の席で捨次郎の行つた演説のことを眞先に記し、その文を新聞紙で見たから早速譯して「時事新報」に載せたと告げている。それが前述の明治二十年十二月十六日附雜報欄の「米國來信」であることは斷わるまでもあるもい。さればこそ「先生も傾蓋舊の如く思ひ知縁を以て先づナップ氏を自宅に延」いたのであつた。人一倍子煩惱だつた福澤にしてみれば、子息等の知り合ひであるばかりか、それらの世話になつていたものということでもあつて、無條件にナップを款待したのはいかにもうなすけよう。殊に前記「愛兒への手紙」の出版により、この間の事情は一層はつきりしてきた。即ち、同書にはナップに言及した書翰十二通（書翰八七、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九七、九九、一〇〇、一〇五、一〇六）が収録され、そのうち、これまでに知られていたのは右にも引いた明治二十年十二月十九日附捨次郎宛書翰（同書、書翰九三）と明治二十一年三月二日附一太郎捨次郎桃介宛書翰（同書、書翰一〇〇、「續福澤全集」第六卷、六五〇―一頁にも所收）との二通にすぎず、それも後者は折角ナップについて記している追書の部分が從來は省かれていたのである。そこで、いま改めて、これらからナップと福澤の長子一太郎との關係をみると、ナップがその出發に先立つて日本の言語、風俗等を取調べた

いというので、一太郎はナッブ宅へ赴き、明治二十年九月末ごろから一ヶ月餘り(約二ヶ月ほど)も滞留して、日本の事情などを話したばかりか、ナッブの來日後の世話を、例えば日本語教師のこと、住居のこと、布教上の便益のこと等について、父たる福澤になにかと依頼してきていたと見え、書翰八七、八九、九一、九二、九三、九四、九七、九九、一〇〇などにそれがうかがえる。しかも、福澤はそれに對して一々「又日本語教師を本塾より云々の義も、い才承〔知〕致候。」(書翰八九、一九三頁)「ナッブの家は三田小山に一軒見出し候得共、當人實際の所望分らずしては慥に借宅の約束も出來不申、何れに致候共、世話は十分に致候積なり。」(書翰九一、一九五頁)といった具合に返事を送り、それを實行している。しかし、これらについては、詳細を一先ず四節にゆずることにしよう。

たゞ、こゝで問題になるのは、個人的關係はそれとして、ではナッブの奉ずる主義に對しては福澤が果してどのような見解と態度とを持つていたかということではなければなるまい。それとも、如上のナッブに對する福澤の好意は全く子息等を通じての關係だけのものであつたのか。これについて、ジョージ・E・アルブレヒト (George E. Albrecht) の英譯になる H. Ritter; A History of Protestant Missions in Japan. Tokyo, 1898. 中の D・C・グリーン (D. C. Greene) による補遺の部分のなか (p. 317-321. The Unitarians) に、ナッブの來朝は恰も福澤を中心とする數名の有力者間におこされた運動がもととなつて、福澤と密接な關係のあつた矢野文雄等同時代の活動家等の提言に應じて實現したものの如く説かれており、この記述ではいかにも福澤が當初から明らかにユニテリアンの布教に一役買つていたようにもみられる。一八八四年(明治十七年)以降福澤が急にキリスト教に對して好意を示した態度の變化(次節参照)などが、おそらくその論據をなすのもあろうが、たとえこれがいゝすぎだとしても、右の「福澤諭吉傳」からの引用

や子息捨次郎宛書翰にみる通り、福澤が「時事新報」(明治二十年十二月十六日附)紙上に、ユニテリアンの教義に關する論説やアメリカにおけるナップ送別會の席上での捨次郎ほか諸氏の挨拶等を丁寧な報じていることなどから推せば、この點、福澤は單なる個人的關係のみに止まらず、ナップの教義そのものに對しても若干好意的ではなかつたかと思われ、るふしも全然ないではない。けれども、それを速断する前にナップの教義、かれが來朝にあつてのわが國內の關心ぶり等について一應述べておくのが順序というべきか。

本節冒頭の引用文中ナップの渡來を報じたという諸新聞については、既述の「時事新報」(明治二十年十二月十六日及び同二十四日附)を除いて、特にそれらを検討してみる餘裕をもたなかつたが、ナップが當時多くの關心をもつて迎えられることはそうした諸新聞が一齊にかれの來朝を報じたという事實から逆に察知されるところであつて、いま山本秀煌編「日本基督教會史」を繙くと、その間の事情をこう書いている。

明治十八年の頃矢野文雄が歐洲より歸朝して報知新聞紙上にユニテリアンの教義の大要を掲げ、それを他の基督教派の教義に比し神秘的分子の尠なきを以て日本に採用すべき恰好の宗派なることを力説したりしたが當時日本は歐化主義最盛時代の事として我國の宗教も亦歐化せざるべからずとの感を懷きし人々の中に多數の共鳴者を起したるものゝ如く、明治二十年ユニテリアン派の代表者アーサー、メイ、ナップの渡來は恰も其共鳴者の期待に適應したるものにして、該派に取りてはまたと得難き開教の好時機なりき。(同書、二〇八頁)

と。矢野文雄はいうまでもなく初期の慶應義塾出身者で、明治初年はやくも塾教師をつとめ、また官界、政界、操觚界に活躍し、このころは歐洲歸りの新知識として錚々たる論客であつた。それが率先ユニテリアンの教義を鼓吹したので

あるから、當時その影響のほども察しられよう。

矢野の洋行は明治十七年四月から同十九年八月（したがって、右に「明治十八年の頃」とあるは十九年でなければならぬし、歸朝の月日も、同年八月二十日、二十七日附「郵便報知新聞」で八月十八日夜と知られるから、後記矢野の傳記に九月とするは訂正されるべきである。）までで、「主としてイギリスに於ける憲法運用の實際、政黨の状態、選舉の模様等を調査し、且歐洲の文物制度を研究せんがため」（小栗又一編「龍溪矢野文雄君傳」、年譜三七二頁、他に同書第七篇外遊と新聞活躍時代二二―二五六頁参照）であつたといわれ、歸國後、かれが「郵便報知新聞」に據つて筆陣をはり、特に知識階級の指導、鞭撻に努めたことは周知の通りである。この矢野がユニテリアンを紹介したのは、かれが歸朝後一ヶ月足らず、その主張で郵便報知の紙面を改良縮小（九月十六日）して間もなく、同年九月二十日（第四〇八七號）から十月九日（第四一〇三號）にわたり十五回（九月二十二、二十七日、十月三、四日を缺く）に及んで掲げた宗教道德に關する論說によつてであつた。それは、かれが歐米視察に基づいて記した諸編を収める「周遊雜記」下卷に含む筈のをとりあえず披露したもので、世界の宗教――主として佛、儒、耶三教の性質からその領分の廣狹、教義の長短及び宗教そのもの、發達過程や効用等々を細叙して、結局終りの三回（十月七、八、九日）に大いにユニテリアンを稱揚、それを國教として採用すべきの理さえ提唱した。こうしたユニテリアンの教義を、かれが果してどこで吸收會得してきたものか、どうやらイギリスにおける收穫のようだが、これほどまでに主張したというのは、さすが明敏なる矢野のことゝて、イギリスはまだしも、當時アメリカの上流知識階級間に占められていた同教派の大きな勢力を、アメリカには歸路わずかに立寄つた程度にすぎなかつたのに、ほんの通りすがりにもすばやく看破し歸つたのかも知れぬ。前掲明治二十年十二月十六日附「時事新報」所載の慶應義塾

社友某よりの通信にも「當國（米國）に新教の宗派は凡そ十派にも分れある其中にもユニテリアンと申すは至極淡泊にして妄信少なき故か學者政治家を始め上流社會にて之に歸依する者多し」などとあり、以てそのころのアメリカにおけるユニテリアンの隆昌を知るに足り、ナップ派遣の意氣込みも自らうかゞえるし、その前觸れがこうして逸早く矢野によつて傳えられたとはいえなからうか。

また、年代は不分明とはいえ、佐波亘編「植村正久と其の時代」（第四卷、五五五頁）には、植村から受洗した島田三郎に誰かゞユニテリアンをすゝめに行つたとき、島田はわたくしは始めからユニテリアンだといつたという話が日本基督教會の長老井深梶之助談として載つてゐる。早稻田大學現總長島田孝一氏の嚴父たる島田のこの歸依は、かれがもともとキリスト教信者であつたにもせよ、當時のわが知識層のユニテリアンに對する志向の一端を示すものといえなからうか。雜誌「眞理」創刊號（明治二十二年十月刊）をみると、右に記した一致教會の植村正久その人さえ「渡英以來英國の「ユニテリアン」なるマルチノー氏の説に意を屬せらるゝと果して信乎」（同誌、四五頁）といつた風に書かれてゐる。さればナップの來朝するや福澤諭吉先生は時事新報紙上に於てナップを紹介し、又朝野の紳士は争ふて彼を招待して其所説を傾聽したり。

と、前記引用文に引續き「日本基督教會史」（二〇八頁）は述べる。この「時事新報」は既に記した通りのものであるし、朝野の紳士が争うてナップを招待して、その所説をきいた一例としては明治二十一年四月十五日の交詢社における講演などが挙げられよう。即ち、同日開かれた交詢社々員大會の席上、ナップは求められて社員として一場の演説を試み、慶應義塾の大先輩で當時教頭の要職にあつた門野幾之進の口譯でユニテリアンの教義を説いた。そして、この筆記は同

年五月五日發行の「交詢雜誌」第二九四號、同じく五月十三日附「時事新報」に載り（「門野幾之進先生事蹟・文集」七四七―七五四頁にも再録してある。）、後日「ユニテリアン之教義」と題して出版配布もされたらしい。

そこで、ナップの唱えるユニテリアンの教義内容は如何というに、ナップ自身の右講演筆記はもとより、かれの送別會での挨拶記事等でも概ね知ることが出來、その他、明治二十一年十一月には「ユニテリアン教義集」なるナップの著述も出ていたというし（「明治文化全集」第十一卷、五六―頁）、さらに明治二十三年三月以降は雑誌「ゆにてりあん」の刊行をみ、大いに同教義が弘布されてもいるが、こゝでは一應前述の矢野の紹介文をかり、并せてこれまでも引用してきた「日本基督教會史」及び比屋根安定著「日本近世基督教人物史」等により略述してみよう。まず、矢野はこういふ。

今此の「ユニテリアン」教派の主眼を畧せむに同派は道德に關する教義に於ては一切耶蘇の徳教を基本とし又上帝上に在て萬物を支配することを信するものなり然れとも唯其耶蘇舊教新教と異なる所は兩約全書經典中の神怪不稽なる部分を信せず耶祖をは唯大聖至聖の人と見做し天と同體物にあらずと爲すに在り新教舊教を問はず尋常の耶蘇教派ならんには耶蘇を以て天と同躰と爲し天と精靈と耶蘇と三者一躰の説を主張し居ることなり然るに「ユニテリアン」派は之を承知せず耶蘇は聖人なり人間世界に布教せる最上の人物なり何處迄も之を尊信すへき人なり然れとも耶蘇聖典中の神怪不思議なる事柄は其徒弟の附加せるものにて耶蘇の本意には非す故に耶祖をは大聖至聖の人と爲し又其教をは實に萬世不易とも思ふへし又此世界の萬物に一定の規則あるは皆是れ天の司る所なれば天を畏れざる可らず天を信し道を慎むの外には別に神怪迷惑の教式を要せずとは是れ「ユニテリアン」派の眼目と爲すなり

「ユニテリアン」派は斯く諸教派に於て最も神怪惑迷の事を削除するが故に理科世界の人と雖も亦た之と抵觸するの

憂なく智力世界の人と雖も亦た之に矛盾するの恐れなし云々（明治十九年十月七日附「郵便報知新聞」第四一〇一號）
次に、「日本基督教會史」は先の引用文に續けて

ナップは其の間に活躍し時々新聞紙上に其意見を開陳してユニテリアン主義の宣傳に努力しつゝありき。彼はユニテリアンを以て宗教の最も進歩したるものとなし「余は耶蘇宗教の部内に在て盛大にして有力なる宗旨の名代として遠く來れり」と揚言し、ユニテリアンは一個の宗派に非ず寧ろ一種人心の運動と稱すべしとの注意をなして米國の學者・識者間に大勢力あるを力説し、日本の知識階級の人々が採用すべき宗旨はユニテリアンにして之を措きて他に信仰すべきものなきが如くに説明したり。云々（同書、二〇八―九頁）

と記し、さらに前記明治二十一年五月五日發行の「交詢雜誌」、同二十一年十二月から翌二十二年一月に至る「報知新聞」、「六合雜誌」第九十七號等を引いて、その教を叙述している。それから、最後の「日本近世基督教人物史」にはこうある。

翻つて基督教界を見るに、二十年には獨逸普及福音教會の宣教師スピネル、二十一年（二十年末の誤）には米國ユニテリアン協會の宣教師ナップ相次いで來り、謂ふところの新神學が襲來してゐた。（同書、一三頁）

普及福音教會が渡來して後二十一年一月（二十年十二月）、米國ユニテリアン協會の宣教師ナップが來るや、矢野文雄は、「報知新聞」紙上にナップを紹介し、日本將來の宗教はユニテリアンたるべしと主張し、福澤諭吉も『時事新報』紙上に彼を歓迎し、ユニテリアン主義の趣意に賛したので、志ある人々はナップを招待して、その所説に傾聽した。ナップも亦、屢々ユニテリアン主義を新聞に掲げ、これを以て宗教の最も進歩したものと做した。彼の所説に據ると、

基督に就いて、「吾人は、敬服してイエスを信する者なり。吾人イエスを以て、神と信するに非ず。唯吾人神子の中に、最も神に近きものにして、吾人に神聖の生路を示したる大教師なりと信するのみ」。聖書に就いては、「抑もバブルは、古昔のヘブル人及び上世の基督教文學の遺物を含有するものなり。蓋し此書が、或る神怪的方法に因りて作られたりとの説を、支持するに足る證據としては、聊も之なきを以て、ユニテリアンは、バブルを以て純然たる人作によれるものなり」。云々(同書、二八九―二九〇頁)

要するに、ユニテリアンはキリスト教を奉ず一宗教には相違ないが、必ずしも一宗一派に固執拘泥することなく、むしろ廣く一種の運動とみなしてもよいもので、妄誕を去り、眞理に基ずき、普通の宗教が概ね重きを未來の生活に置いて、死後の喜びと恐れとにつき講説するのに、ユニテリアン教徒は却つて現世の生活の幸を進め、それを善美なるものとすることを主として願ひ、いわば比較的抹香くさくなく、淡泊で、そうした點、或は福澤の考えといかにもマッチするところがあつたのではあるまいか。

二、福澤の宗教觀とユニテリアン

「福澤諭吉傳」(第四卷、四七一―一〇頁、第四十編宗教に對する態度)によれば、福澤は「元來宗教には甚だ淡泊であつて、いづれの宗旨をも信ぜられなかつた。」(同書、四七頁)それは、一つには日本士族一般の習慣として宗教に對し大體關心がうすかつたということもあるかも知れないし、一つには母親ゆすりの性格も多分にあつたことでもあろう。福澤は自傳中にその母を語り、母は宗教については近所の老婦人達のように一向普通の信心なく、家は代々眞宗でありながら、

寺に參つて阿彌陀様を拜むことばかりはおかしくてキマリが悪くてとても出来ない、常々話していたという。そして、福澤も事實、既に少年のころから神佛不信仰にはよほど徹底していた。十二、三才のころ、殿様の名の書いてある紙を踏んで兄に叱られ、どうにも納得がいかず、すゝんで、こんどは神様の名のある御札を足にかけてみて、子供心に神罰如何をためしてみたとか、稻荷の社の神體を入れかえて、やがて初午となり人々がそれに御神酒をあけて拜んでいるのを獨り笑つていたとかいつた話柄は、これも自傳中に語られているところで、あまりにも有名である。もちろん、こうした少年時代の粗朴な悪戯的行動のみから推して福澤の宗教觀を論斷することは行きすぎようが、福澤は他にも、自分がいかに宗教に淡泊であるかをしばしば自ら言明している。前掲「福澤諭吉傳」(第四卷、五〇―一頁)の引くその一例は明治十一年頃に書かれた「肉食妻帶論」(明治十二年八月刊「福澤文集」二編、卷一掲載―「福澤全集」第四卷、六〇―五頁所收)、明治二十二年五月(十一日)「時事新報」(社説)に載つた「宗教(旨) 雑話」(同全集第九卷、五〇―五頁所收)の端書等で、前者には「余が流儀は何宗をも信向せず、唯先祖以來の寺を頼み、住處替れば又其地の寺を頼で、親が死ぬば親を葬り、子が死ぬば子を埋め、世間並にして安心するのみ。云々」後者には「(前略) 蓋し先生の家は代々眞宗にて、古來藩士族のことなれば宗教には至て淡泊にして、家族男女共に寺に參詣して説法を聽聞したることもなく、家内に佛法を語る者もなく、殆んど無宗旨の如くなれども、云々」とみられる。後者は文言第三者の筆のようにもあるが、福澤自から筆記したものだといわれる。また、後述の「時事小言」とか、「時事新報」社説「宗教も亦西洋風に從はざるを得ず」とか、さらに後に紹介する「福澤全集」未收の一文「ユニテリアン雜誌に寄す」なども、この邊の事情をかゞうには恰好の資料とならう。

しかし、他方、「佛法にても耶蘇教にても孰れにても宜しい、之を引立て、多數の民心を和けるやうにする事」——それは福澤が自傳の結びに述べて、生涯の中に出來してみたいといつた三箇條の一である。それが、たとえ、社會の安寧という經世上の一點からその功德を説いたものにもせよ、これを以てすれば、福澤は決して宗教に無關心であつたわけではない。いな、むしろ相當に深い關心を持つていたところさうべきか。これは餘談になるが、現駐日イギリス大使の嚴父ウォルター・デニングの如き、明治初年英國々教の宣教師として來日しながら、ときどき福澤と宗教論をたゝかわしている間に、ついに國教を離れて僧籍を脱したとさえいわれ（「福澤諭吉傳」第四卷、四〇六頁）、現に宗教に關する論説も、福澤にはいくつもある。そのうち、キリスト教については、まず「時事小言」（明治十四年九月刊——「福澤全集」第五卷、二四三—四一〇頁所收）その他に、國權保護の立場から、國民の氣力を養うために外教の蔓延を防ぐの必要なるべきを論じたことがあり、この前後の福澤及び福澤一派の反キリスト教的論旨はかなり有力なものであつたとみえ、一般の日本キリスト教史にはこれを相當重視してとりあげているものが少なくない。つまり、當時キリスト教に反對した思想には、大別して保守主義、功利論、不可知論などがあつて、不可知論は東京大學がこれを主唱し、慶應義塾は功利論を稱え（比屋根安定著「日本基督教史要」、一四六頁）、福澤派即ち交詢社の輩は、多くバツクル『文明史』流の唯物論、實利主義に據つて基督教を非難（「植村正久と其の時代」第五卷、一三頁）したというのだが、なかでも隅谷三喜男氏の近著「近代日本の形成とキリスト教」（昭和二十五年十一月十五日刊）は、大分それを強調してこう論じている。

明六社員加藤弘之等は進化論に立つて唯物論を説き、キリスト教の不合理なる事を以て専ら攻撃の論據としたのである。維新前後における進歩主義者であり、イギリス功利主義の影響を受けた明六社員福澤諭吉||慶應義塾||時事新報

も亦、ブルジョアの國權論の立場からキリスト教を論難したのである。(同書、四六頁)

この頃キリスト教が戦わねばならなかつた理論的な敵手としては、東京大學の外になお福澤諭吉を中心とする慶應義塾一派があつた。福澤の反キリスト教的態度は教會設立以來のことであるが、(明治)十四年以降かかる態度は一層顯著となつた。彼は十五年時事新報を發刊したが、毎號キリスト教の攻撃をのせざることをなすと云う状態であつた。

「耶蘇宗教の蔓延は、後世子孫國權維持の爲に大なる障害と云ふ可し。今日の信者にして其蔓延を助成する者は、自ら國權を滅殺すと云ふべし」。

彼はキリスト教防止のためには、佛教すら之が手段として活用すべきだとした。云々(同書、六二頁)と。引用の部分は「時事小言」(前掲「福澤全集」第五卷、三九〇頁参照)からという。

けれども、福澤のこうした反キリスト教的態度も、實はもともと、その教の正邪眞偽を斷じたものではなく一時の經世的方便で、世情の變化につれては、明治十七年六月に至り「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」(「續福澤全集」第一卷、七四二―九頁所收)と題する社説を「時事新報」(同六、七兩日)に掲げ、前説をさりと改めているのである。それで、前節に紹介したH・リッターの「日本キリスト新教傳道史」—A History of Protestant Missions in Japan Tokyo, 1898. の如きは、「好意ある民間の意見(福澤)」—p. 126~8. Favorable Popular Opinion (Fukuzawa). なる項を設けて、むしろこの轉換後の福澤の態度に重きをおき、それを力説して、福澤が一八八四年(明治十七年)その二兒をキリスト教信者の或る日本人の監督下にアメリカへ留學させたり、一八八七年(明治二十年)その三人の娘達を一致教會の教育機關たる「ユニオン、ミッション、ホーム」(Union Mission Home)に入れたりした私事をまでとりあげ、

「かれは、かれの國の國民達をともしれば脅かそうとする道德的誘惑に對し、キリスト教こそ最も強い防禦になるであろうと、明らかに確信していた。」(同書、一二八頁)と結んでいられるほどである。それでなくとも、福澤は元來はじめから宗教の主義に反對したのではなかつたから、「外國の宣教師などに對しては少しも毛嫌ひされるやうなことはなかつた。」(「福澤諭吉傳」第四卷、六〇頁)ばかりか、早くからすゝんで親しく交わつてもいる。前節に述べたドクトル・シモンズ、右に記したウオルター・デニングはいわすもがな、輕井澤に別莊をつくつた元祖といわれるアレキサンダー・ショーや、その紹介で知つたミス・ホール等も明治七、八年ごろ共に福澤邸内に住居してゐたことがあり(同書、六一頁)、また、當時二川(後、小島)一騰なるキリスト教徒の官に捕えられたのを斡旋して赦免につくしたといつた逸話(「日本基督教會史」、二二頁)も残された。そして、後にはその議論の如何に拘わらず、むしろキリスト教布教の方法に關し種々の勸告をさえ與えたりもしている。その趣旨の要は、これを載せて「福澤諭吉傳」(第四卷、六四―八頁)に詳らかで、即ち福澤は外國宣教師等の布教上の盡力につき、「經世上に功德を認められたけれども、其頃の彼等の布教法が露骨急激にして日本人の習慣風俗に戻り、却て人心の反抗を招がんことを懸念せられ、世安のため又宗教自身のために丁寧親切に其注意を促されたのである。」(同書、六八頁)因みに、こうしたことは前節に記した「愛兒への手紙」所收の書翰二七(明治十七年五月十二日附、一太郎宛福澤書翰)にも同様しのばれ、その意味で、この書翰は右書刊行に先立ち、昭和二十六年二月、同編者富田正文氏により、「世界」誌上(五一―二頁)に紹介されたこともある。アメリカの新聞に、當時、慶應義塾に非常に多くのキリスト教信者が出たといつた記事でも載つたものか、それについて一太郎から問合せがあつたらしく、これが返書として、その噂の眞偽如何から、在日外人宣教師の布教方法に對する痛烈な批判をまで含んでいるので

ある。

こうして、福澤と宗教、又は福澤及び慶應義塾とキリスト教との關係については種々なお論すべき點もあるであろうが、經世上の便法はしばらく措き、福澤が宗教に對しては至つて淡泊で、どの宗派にも一向偏せず、キリスト教もとよりその例外でなかつたのは、一應既述の通りである。慶應義塾の塾生中には、或るものは明治初年義塾がはじめて外人教師を傭うや、その牧師に感化され「多少基督教熱を催うし、日々築地に通ひ」(「慶應義塾五十年史」、一三八頁)、バイブルの講義をきいたり讚美歌を唱えるに至つたかと思えば、他方これに反對するものもあり、福澤が一時外教防遏論を主張すれば、「塾中にも基督教排斥の説を爲す者」(「福澤論吉傳」第四卷、六〇頁)が出で、福澤派のキリスト教排斥がさわがれたりしたこともある。例えば、青山霞村著「同志社五十年裏面史」などには、「明治十三年慶應義塾出身で、後の改進黨の領袖、矢野文雄、内閣大臣の山本達雄氏等が、本願寺のために基督教を攻撃し、十五年の夏には破邪の演舌會が四回も開かれ、一回は加藤政之助箕浦勝人鎌田榮吉その他が入浴して、耶蘇攻撃論をやる。」(同書、八九頁)といつた風にも書かれ、福澤派のキリスト教攻撃運動が京都にまで及んでいたことになる。一方、やはり義塾出身の津田純一、須田辰次郎兩名によるインガソール著「耶蘇教排斥論」の翻譯が出たのも、このころ(明治十五年)であつた。だが、これらも福澤個人とすれば、「抑も慶應義塾は依然として舊に異ならず、耶蘇を咎るに非ず、佛法を誹るにあらず、宗教上の事は一切自由自在に任して曾て之に干涉したることなし。」(前掲「愛兒への手紙」書翰二七、七六頁)といつた次第で、いわば終始無干涉、放任主義であつたといわれる。

しかれば、こゝにユニテリアンに對しては如何。その點になると、さきにも一言した通り、心なしか、福澤も一般に

比しいさゝか趣を異にするものがあつたように感ぜられる。思うに、そのことは前節に述べ、また四節にも記すであろう。ようなナップの福澤との特殊な友好關係に基ずくのもあろうが、前節に説明したユニテリアンの教義自體が、右に掲げた福澤の宗教觀に大分近いものを持つてゐることも、或はそんな氣をおこさせる一つの素因をなしてはいはしまいか。福澤もとより宗教には至つて淡泊であつたとはいへ、その胸底一片の宗教的感情をも止めなかつたわけでは決してあるまい。かつて小泉信三氏は、「平生の心がけ」なる隨筆の「人の噂」の項（『文藝春秋』昭和二十七年九月號、三九―四〇頁）のなかで、福澤がその子女に與えた「日々のをしへ」（だい八）に、「ゴッドのありがたきをしり、ゴッドのこゝろにしたがうべき」を教えてゐるのをさし、福澤のこの方面の思想をうかがう上に、この短章は特殊の稀少價值をもつてゐることを述べておられた。「日々のをしへ」（『續福澤全集』第七卷、四〇三―四一頁、「福澤諭吉傳」第四卷、四四〇―四五〇頁所收）は明治四年九才と七才の一太郎、捨次郎兩兒に書き與えられたもので、別の條下（同、貳編、だい一）に「てんとうさまをおそれ、これをうやまい、そのこゝろにしたがふべし」と教えてゐる「てんとうさま」も、やはり「ごつどといひ」「にほんのことばにほんやくすれば、ざうぶつしやといふもの」と説明され、この「ゴッド」を一概にキリスト教に結びつけるのは早計だとしても、福澤の心のうちに多少とも「宗教的」感情のやどしてゐたことは疑えまい。たゞ、その理智が世間に行われている信仰のための一般宗教に無條件に同することを許さなかつたまでである。これについて、既述の通りナップは明治二十三年三月ユニテリアンの教義弘布のため雑誌「ゆにてりあん」を創刊したが、福澤はその創刊號に「ユニテリアン雜誌に寄す」と題する一編を投じ、これをみると、一入その感をおぼえさせられるものがあるようだ。この一文は從來の「福澤全集」には未收かと思われるので、特に左に全文を掲げるから参照せられたい。中

村正直の「ナップ君の雑誌發行につき一言す」及び杉浦重剛の「ユニテリアン雑誌發行に就て」の二編とならべて、同誌第壹號（明治二十三年三月一日刊）「寄書」欄のはじめ（一九——二二頁）に所載のものである。

○ユニテリアン雑誌に寄す

福澤論吉

余か親友なる米國の碩學ミストル、ナップは、一昨年始めて日本に渡來して、始めてユニテリアン教の主義を公示してより、我士人中に此新主義を悦ぶもの多く、短日月の間に無数の朋友を得て渡來の勞空しからざるのみか、前途の望み甚た大なるが爲め、今回は更に雑誌を發兌して廣く公衆の注意を促し、益々其教旨を明かにせんとの企あり、蓋し其發兌の趣意は、一黨一派の機關に供するにあらず、唯哲學の學理を根據にして、日本國民の社交、道德、宗教に於ける事情を評論し、以て人類の智德發達を謀り、以て其現世の利益を進めんとするものなりと云ふ、余は素と日本士族の家に生れ、少小の教育は當時普通の古學流なりしか、今を去ること三十六七年前齡二十才の頃、偶然の機會にて洋學に志し之を悦ふこと甚たし、就中洋學の根據とするところ、都て數理を離れず、一切萬事眞理原則の基礎にあるを發見し、之を我古學流の漠然たるものに比して同日の論にあらざるを悟り、専心一意自から之を修め、又後進の子弟をも導き、今日に至る迄曾て志を變したるに（こ）となく、一身恰かも眞理原則の塊たらんと欲する者なれとも、偕て宗教の事に至りては、祖先累世の遺傳に由るものか、如何にも淡泊にして熱するを得ず、自國の佛法を信せざる如く、西洋の耶蘇教に向ても亦信心なし、滔々たる凡俗世界に宗教の必要なるは飽くまでも之を了解して其盛に行はるゝを悦ふと雖も、身躬ら其宗教に入るを得ず、或ひは人の爲めに自ら信心を装はんと欲すれとも、斯くては虚飾にし

て之を敢てするに忍びず、去れば一身を處するに如何と云へは、生來物を盗みたることなく、偽りを行ふたることなく、人を欺きたることなく、身の私行を慎んで、俯仰愧つるところのものなしと雖も、其盜まず、偽らず、欺かず、又謹慎するは、宗教に教ひられ、宗教を恐れて然るにあらず、唯自身の自然に然るのみ、

斯る余が身の有様なれば、宗教の正邪の如き、固より之を問はざるのみか、問はんと欲する心もなく、何宗にても其自由自在に任して、然かも常に之に敬意を表し、繁昌を祈るものなれとも、其宗教の効力をして人事の實際に現はるゝ所のものに就ては、經世の眼より見て聊か所望なきを得ず、今の宗教の教る所にて、佛を頼み上帝を信して未來を重するは至極妙なれとも、第一に人に清淨を教ゆるものは、其身先づ自から清かならざるべからず、未來の天上極樂に往生して靈魂不死ならんとするには、其初步として現在の生活を極樂にせざるべからず、吾々凡夫の眼にも其道理は明白なるに、然るに宗教の信者、否な時としては其教師の中にも、此道理に暗くして、専ら天に事ふるの儀式義務を説て、人に交わり家に居るの法を等閑に附するものあり、甚しきは現在の家を地獄にして、一蹶直ちに未來の極樂往生を期するものなきにあらず、感服せざる所なり、ミストル、ナップの言に従へば、ユニテリアン教は必ずしも一派の宗教宗門にあらずして、洋語にしてムーウメントと稱し、邦言に譯すれば、運動、動勢、運機とも云ふべきものなりと云ふ、其果して宗教なると然らざるとは余が關せざる所なれとも、教の目的は人類の位を高尙にして、智力の働きを自由にし博愛を主とし、一個人一家族の關係に至るまでも、之を網羅して善に向はしむるにありとることなれば、都て是れ現在の人事にして、余輩宗教不案内の者にも甚た解し易く、果して其實効を奏せんには、人間至大の幸福これに過るものあらず、就中一個人一家族の關係を善に進るとは、今日我日本社會の急要にして遠きに至るは近き

よりするの諺に違はず、現在の家を極樂にせんことを偏に企望する處なり

祖先累世の遺傳によるものか、自分は生來宗教については至つて淡泊で、とりたてゝ何教何宗を信ずるといふことはないが、といつて一身を處するに決して愧ずるようなことを仕出かした覺えもない、そんなだから宗教のことはさつぱり不案内だし、ユニテリアンが果して宗教といえるかどうか、それも別に關知したことではないけれど、聞くところによれば、世間に間々みるような迂遠な教義を説く宗教と違つて、ユニテリアンは解し易くもあり、現實的でもあつて、今日のわが國の社會にいさゝか向くように思われるといつた論旨とうけとつて大過あるまい。

そればかりではない、福澤と十有餘年の親交を結び、「實に八年間氏（福澤）の邸内に住居」していたというユニテリアン、クレイ・マコーレーは後年福澤の訃音に接した際、ボストン週刊雜誌「クリスタン レヂスタ」第八十卷第十四號（一九〇一年四月四日刊）に哀悼文を寄せ、そのなかでこういつている。「慶應義塾學報」第四十四號（明治三十四年九月刊）に譯文が載つているから、それから拔萃してみよう。

氏（福澤）は諸般の問題を論ずるに當り専ら理論に重きを置きラシヨナリズムを喜べるを以てユニテリアンの所説は最も氏の心を得たる者にして従て氏は深く吾人の布教事業に同情を寄せたり。（同書、三二頁）

近年に及びて氏は幾度か余に向てユニテリアン派を擧げて日本の上流社會に行はるゝ一二社會上の大弊害を攻撃せん事を勧誘せられ殊に氏の監督せる大日刊新聞とユニテリアン派の機關雜誌と相提携して此運動に従事せん事を承諾せられたり。（同書、三二頁）

米國のユニテリアン教徒は又社會の改善に盡瘁せる此日本人民の大先覺者に對して感謝の意を表せざる可らざる特別

なる理由を有せり。何となれば福澤氏は最初よりユニテリアン派の朋友となりてその傳道事業に好意を表し之が爲に辯解の勞を執りし事も亦少からざればなり。(同書、三四頁)

福澤がいかにユニテリアンに好意的であつたか、少なくとも同派宣教師にはそううけとられていたこと、それがこれで明らかにかゞえよう。「氏の監督せる大日刊新聞」とはもちろん「時事新報」をさすのであろうが、それとの提携も合意の上で企てられていたというのだ。マコーレーは、大日本文明協會刊「明治文化發祥記念誌」(明治文化に寄與せる歐米人の略歴、四一頁)によると、J. K. McCauley—というのがあり、ハーバード出身の宣教師で、一八八〇年(明治十三年)來朝し、三田に住して傳道に従うかたわら慶應義塾にも種々有益な助言を與えた人であつたとあるが、それとこの記事の人物との異同には若干疑義がある。即ち、H・リッターの「日本キリスト新教傳道史」—A History of Protestant Missions in Japan. Tokyo, 1898.—のユニテリアンの項(前節參照)では、一八八九年(明治二十二年)秋、ナップ再來の折、この同僚クレイ・マコーレー (Clay Mac Cauley) を伴つたことになつており、翌年ナップの歸國後は主としてユニテリアン教の宣教事務を擔當していたのである(三、四節參照)。(果して、義塾と關係をもつた別のマコーレーが、もう一人いたものか、なにか混同があるのではあるまいか。明治學院に教えていたJ・M・マコーレーなら一八七九年來朝という。)

さて、こうなると、福澤が單にユニテリアンに好意的であつたというよりは、もつと積極的に、恰も共鳴してゐいたかの感を人に與えるのも故なしとしまい。それに、こうした福澤の立場を反映してかどうか、塾生中にも同協會に入りするもの間々あり(次節參照)、これがため世間一般はもとより、義塾關係者中にも専ら福澤はユニテリアンびいき、そしてかれを支柱とする慶應義塾はユニテリアンと特殊な關係にあると信ずるものがあつたようで、當時ナップは却つ

てそうした噂を打消するための辯明をさえ試みねばならなかつた。だが、このようなユニテリアンとの關係については、論點を押しすゝめて、義塾の大學部設置との關連において、これをみる必要があろう。次にそれを述べてみたい。

三、慶應義塾の大學部設置とナップ

既に前節にも記した雑誌「ゆにてりあん」創刊號に、「慶應義塾とユニテリアン教徒」と題した左のようなナップの一文が載つてゐる。當時、新聞紙上に慶應義塾とユニテリアン教（協）會とが同盟を結んだという爭論があらわれ、それに對するナップのいわば釋明なのである。思うに、この一文によつて、義塾とユニテリアンとのかなり密接な關係が、少くともそれに對する世間一般の眼が、如實に裏書されるであらうし、同時に、義塾の大學部設置にあつてのナップの役割といつたものも、或る程度知られよう。

近頃新聞紙上に於て、慶應義塾とユニテリアン教會とか同盟を爲したりとの爭論を生じ、吾輩の感情を惹き起したり、故に今まその事實を説明するは、蓋し必要のことなるべし、ユニテリアン教徒は決して傳道者たるにあらず、却てユニテリアン教徒は宗派的教育法の仇敵なることは、左の事實に於て自ら明かなるべし、余は福澤諭吉君と友人の間柄なるか故に、君か創立せる新大學の教授を撰擇すべきの委任を受けたり、但し我か欲する所ならんには、ユニテリアン教の説教者にて苦しからずとの事なりし、併し、何れの宗派にも屬せずと云ふユニテリアン教の精神に従て、余は此教と關係せざる所の人を得んと欲して非常に奔走せしが、遂に三人の教授を得たり、其一人はコングレゲーション派の人にして、又たその一人はエビスコパル派の人なり、而して今ま一人はバプテスト派の人なりしなり、何を計

らんこの人々は皆なユニテリアン教を賛成する所の人ならんとは、之に依て考ふれば、米國に於て高等の教育を受けたる人ならんには、如何なる宗派の人と雖、多くはユニテリアン教ヲ(を)信仰する人なるを證するに足れり、蓋しこの人々は説教者たるにもあらず、孰れの點より考ふるも、決して宗派に屬する人々にはあらざるべし、この人々か社會學若くは文學を以て、日本在留のユニテリアン教の代表者を扶助するは、蓋し慶應義塾教授の資格を以て爲すにあらず、惟た一己の資格を以て爲すものならん(同誌、「雜報」欄三五―六頁)

即ち、ナップにいわせれば、世間で噂するほど、義塾がユニテリアンと緊密に提携していたといふのではないが、折しも義塾大學部設置の計畫をもつていた福澤は、たまたまナップと親しい間柄にあつたため、恰もよし、このナップとの親交を利し、アメリカから良き教師を得んとして、それが斡旋をかれに依頼したわけである。強いていえば、その際福澤が招聘教師は「ユニテリアン教の説教者にて苦しからず」といつたとあるが、それも、果して「世間の噂」ほどの深い意味をもつものかどうかは甚だ疑問であろう。ナップの辯明には、なんといつても、自らナップ自身の立場の擁護、宣傳が意圖されていることでもあろうが、福澤にしてみれば、事實、例の世間の思わくに對する無頓着と、専ら實を重んずる建前とから、その良教師を得るといふ目的においてはすれさえしなければ、ナップの信奉する教義がユニテリアンであろうとなかろうと、また、世間がナップやユニテリアンと義塾との關係をいかように噂しようとも、そんなことは一切かまわなかつたのかも知れない。たゞ、結果として、迎えられた三名の教師が、ナップの苦心(?)にも拘わらず、そろいもそろつてユニテリアン信奉者であつて、これが一層「世間の噂」を高くしたのは否めまい。

とにかく、このころの慶應義塾の外人教師というものは、明治二十年四月十三日附で滯米中の一太郎に宛てた書翰に、

福澤自身、「本塾には唯今外國人六七名を雇入れて英語を教ゆ。左れども其中英人ロイド氏を除くの外は眞に學者なるものなし。」(「愛見への手紙」、一六五頁)と認めているくらいで、それより數年前同じく一太郎宛の明治十七年五月十二日附書翰に「現今雇の教師は英人一名米人貳名、何れも耶蘇信者か又は耶蘇教師云々」(同書、七六頁)といつてゐるのに比べれば、數においてこそ若干の増加をみせたとはいへ、質においてはわずかにアーサー・ロイドがいたくらいで、まだまださして誇るに足らぬ實情にあつた。したがつて、當時福澤の心には良教師を得たいという氣持がしきりに動いていたものであろう。明治十九年七月三十一日附の、これも滯米中の馬場辰猪に宛てた書翰には「慶應義塾も本年秋より大に改革して多く外國人を雇入教場都て英語を用ひて日本語を禁する位に致候積にて昨今其計畫中に御座候」(「續福澤全集」第六卷、一一〇頁)と書きおくつてゐる。時も折、ナップとの親交がひらけ、しかもナップはアメリカでも有數な大學ハーバードにゆかりのあるもの、どうして福澤がこれを見逃がそうか。

ナップとハーバードとの關係はもちろんユニテリアンを通じてのもので、つまり「米國第一等の大學校なる「ハーバード」大學校近代の總長七名も此説の人」(「門野幾之進先生事蹟・文集」所收、「宣教師ナップ氏演説の口譯」、七四九頁)で、いわば「ハーバードはユニテリアンの本據であつた。」(「慶應義塾基督教青年會三十年史」所載、向軍治「追懷」、三九頁)それで、ナップがはじめて來朝する際、ボストンで催された送別會(一節参照)にも時の總長エリオットがちやんと列席してゐるのである。尤も、單にそれだけの理由なら、前節に記した同じユニテリアンのマコーレーも福澤の生前十有餘年の交遊があつたのだし(出身もハーバードかも知れない)、その親密さは必ずしもナップに劣るとは思えぬばかりか、マコーレー自身、塾でも教鞭を執つていたとかいえないとかいわれるほど關係があるのに、この斡旋をマコーレーに頼まず、な

ゼナップに托したのかとの疑問も或は生ずるかも知れないけれども、これは、むしろ、ナップが恰度明治二十二年五月、義塾大學部設置に先立つて一旦歸國することになつたから、その機會がおそらく利用されたものではあるまいか。それに、福澤のマコーレーとの親交も、實はいつからのことなのか定かでないし、八年間福澤の邸内に住居していたという以上、マコーレーが義塾とも必ずやなんらかの關係があつたろうことはもちろん容易に想像は出来るが、いざかれが實際に義塾の教壇に立つていたかどうかとなると、それが至つてあまいで、殊に、前節に記したように、その來朝がナップ再來のときであれば、かれも、やはりユニテリアンの關係で、ナップのやつてきた後にようやく福澤に近づきを得たというのが本當かも知れない。もし、そうとすれば、右の疑は一層わけもなく氷解し得るわけであろう。なお、マコーレーの教員云々については、「日本基督教會史」(二二一頁)に、ナップが神田佐一郎や佐治實然等とユニテリアン協會を組織して後、「尋いてマコーレー來り慶應義塾に教鞭を執りながら」、唯(惟)一館でユニテリアン主義の宣傳に努めたとあるが、明治三十七年四月政治科卒業の塾員である福澤の末男、大四郎氏の記憶では、「あの人は先生はやらなかつたでしょう。」(昭和二十七年四月十一日慶應義塾史編纂所主催、同氏座談會速記録)といわれるし、同四十一年三月これも政治科を卒業した義塾大學名譽教授高橋誠一郎氏は、ユニテリアンと塾との關係を述べて、「もしあつたとすれば、ユニテリアンにマコーレーという人がおつた。そのマコーレーがこゝの先生をしておつた。云々」(昭和二十七年三月七日同編纂所主催、高橋誠一郎氏座談會速記録)と語つておられ、年代の相違の故もあるか、一致を缺いている。

さて、ナップが明治二十年十二月二十一日來朝し、各方面に大いにユニテリアンの宣傳に努めていたことは一節に述べたところで、その後、明治三十一年七月「慶應義塾學報」第五號に寄せた「日本の地震」なるかれの論稿に「數年以

前の夏磐梯山破裂の際には余は僅かに九十哩の遠距離にある同脈の山麓にありたりしが云々」(同書、二三頁)と書いている通り、かの明治二十一年七月十五日の磐梯山大噴火のときも依然かれは在日していたのだが、次節に記すように、その翌二十二年五月、米國ボストンのトレモント、テンプルに開かれたユニテリアンの第六十四回大會において日本の布教に關する報告をするため一時歸國することになつたのである。この、かれの歸國を前にして、義塾に外人教師を招聘するの件が話を進められ、それらの経緯が「續福澤全集」第六卷所收の書翰八四六、八四七、八四八、八一五等(これらの書翰は小泉信三著「福澤諭吉の人と書翰」にも、書翰六〇、六四、六六として、一番目を除き全部収録されている。一)によつて察せられる。まえの三通は當時大學部設置準備のため特に推されて塾長の地位にあつた小泉信吉宛、あとの一通はアメリカより歸朝の後山陽鐵道會社に勤務していた次男捨次郎宛のものである。

それらを見ると、まずナツプは五月三日が出發の豫定日だつたらしく、

ナツプも五月三日には出發の義其前には都て用意不致ては不相成事と存候(前掲書翰八四六、明治二十二年三月一日附。同書第六卷、六九一頁)

といふ、また

今日ナツプ氏へ御出のよし然處一太郎より承候得ば教師の給料三人各二千四百圓合して七千貳百圓のやうに御申出相成候よし右は何等の行違に候哉(中略)

右の次第旁明早朝老生自からナツプへ參詰談致候積り吳々も緩くわんなき話しは御無用可被下候(下略)(前掲書翰八四七、

明治二十二年四月十二日附。同書第六卷、六九二頁)

ともいつている。つまり、ナツプを通じての外人教師招聘の件はナツプの歸國前に充分すゝめられ、大體小泉塾長がその衝にあつたと考えられるが、福澤は「何事にも積極的に細大もらさず世話を焼かなければ承知出来ない平生の性分からも、慶應義塾の維持經營を人任せにするといふことは出来ない」(前掲「福澤諭吉の人と書翰」、三二―三頁)で、備入教師の給料のことにつき、當事者をかかりないがしろにするような態度にまで出た。福澤の心ぐみでは、はじめ「ロー」(Law)と「ソシヤルサイヤンス」(Social Science)の教師は各一、四〇〇圓、「エングリスリテラチュール」(English Literature)の教師は一、八〇〇圓、計六、六〇〇圓のつもりでいたものを、小泉が三名共各二、四〇〇圓、合して七、二〇〇圓と交渉してきたと聞き傳えて、そんなことでは困る、これは明早朝自分で直々打合せに行くから引込んでいてもらいたいといった含みを示したものである。それについて、この小泉の嗣子である前慶應義塾長小泉信三氏は、父信吉が塾長就任の際は一切を任される筈だつたのに、

然し、一たび塾長に就任して見ると、福澤は必しもその一々の處置に満足せず、福澤を無権力のものにするといひつゝ日常大小の塾務に口を介んだものらしい。本書に收めた書翰の一つでも、外人教師招聘の條件につき、福澤は塾長たる小泉の交渉の仕方に納得せず、自分が直接仲介者に會つて「詰談」するなど、いつている(六〇)。小泉としては甘んじて従ふべき限りではない。此時の結末は何う着いたか、詳かでないが、小泉としては固より平かならず、先生の約束が違ふといひたいところであつたらう。(同書、三三頁)

といつている。しかし、なんにしても、結果的には同二十二年十月二十二日、ナツプは三名の教師を連れて再來し、明治二十二年九月三日附(前掲書翰八四八)で「偕塾の秋期も週日の中に始まり又ナツプ氏よりも來狀彼の教師も大抵は來

十月初旬か中旬には渡來可致旨申參隨分多事に御座候云々」(前掲書第六卷、六九三頁)と、しきりに期待していたものが遂に實現をみた。そして、前記の給料問題は、どうやら双方歩みよりの上、三人共各一ヶ年二、三〇〇圓の同額で話がついたらしい。それというのは、明治二十二年十二月十五日に開かれた義塾の第一期第三回評議員會において可決した同二十三年度の大學部出納豫算のうち、支出の部に次のような記録があり、この文、理、法各部一名の外人教師こそ、右の三人であつたらうと思われるからである。

外國教師給料 六、九〇〇、〇〇〇

但シ文學部壹人理財部壹人法律部壹人各壹ヶ年貳千參百圓ニテ雇入費用合計 (評議員決議録、第壹號、一一頁—原文は横書—)

つまり、はじめ二人は二、四〇〇圓づつ、一人は一、八〇〇圓と豫定していたところ、小泉により一旦三人共各二、四〇〇圓として交渉されたのを、結局前者は一人當り一〇〇圓づつ減じ後者には五〇〇圓を増して三人同額の二、三〇〇圓とし、總額で六〇〇圓生ずべき差を三〇〇圓の半額にまで切りつめて落着したものと見えよう。かくて福澤は、さらに翌二十三年一月二十七日の大學部始業式において

(前畧)、又ミストル・ナップの周旋を煩はして、新に三名の良教師を米國に聘し、文學科にはプロフェッサ・リスカム、理財科にはプロフェッサ・ドロップ、法學科にはプロフェッサ・ウキグモルを教頭に仰ぎ、云々 (「福澤論吉傳」第三卷、五八一頁)

と、意氣揚々演説をした。

右三教師の來着の日は前述の書翰八一五(明治二十二年十月二十五日附捨次郎宛) 追書に「ナップ氏は教師三名と共に二十一日著致候得共云々」(前掲書第六卷、六六〇頁)とあるので知られ(「福澤諭吉傳」第三卷、五八〇頁に九月來着とあるは誤記か)、「慶應義塾學報」第六號(明治三十一年八月刊、二二一五頁)所載の「ガーレット ドロップス氏自叙傳」及び高橋梵仙編著「日本人口統計史」(二一六―七頁)所載のドロップス略傳には、かれがヨーロッパ遊學の途、一八八九年(明治二十二年)七月「マンスタンス湖畔のグレンツ」にいた際、日本國東京の慶應義塾から理財學の講師に囑託したいとの書信が到り、直ちにこれを承諾して、ひとまずアメリカに歸り、マサチュセツ州のケンブリッヂで夫人を迎え、十月三日(「日本人口統計史」には十三日とあるも、到着日から逆算して誤か。また、就任も同書に一八八九年一月とあるは一八九〇年でなければなるまい。) 桑港出帆、月末に日本に着いたと記されている。時にドロップスの年令三十才。もちろん他の二教師も同行したものと思われる。これまでに再三引用してきたH・リッターの「日本キリスト新教傳道史」(英譯本、三一八頁)には、それを「一八八九年(明治二十二年)ナップ氏は合衆國に歸り、同年秋同僚クレイ・マコーレーに伴われて再びこの國にやつてきた。同時に東京の慶應義塾は、やはりユニテリアン教團の補佐者に任ぜられていた三名の教授、ガーレット・ドロップス、W・J・リスカム及びJ・H・ウイグモアをアメリカから備入れた。」と記してある。この三教師は、しかも、そろいもそろつてユニテリアン關係者なのであつた。それは、本節當初に記したナップの言の如く、かれの苦心の奔走にも拘わらずであつたか否かは速斷を許さぬとしても、各自所屬する派こそ違え、三人が三人ユニテリアン信奉者で、ナップが後に「ゆにてりあん」を發刊して以後、殆んど每號といつてよいほど、三名のうちのだれかがきつとそれに論説を載せている有様である。また、慶應義塾の「評議員決議録」(第一號、七二頁)をみると、明治

二十五年七月十五日及び同九月十五日の第二期第一〇、一一回會議における議決事項中次のような記載があり、これもユニテリアンとこれら教師との具體的な關係をうかがうに足る一資料にならうか。即ち、同年リスカムとドロップーズの兩名につき二ヶ年契約持續をすることになつた際、兩名から申出があつて、これまで義塾に奉職のかたわらユニテリアンの布教にも従事して、年俸五〇〇圓をうけていたけれど、自今教授のことのみ専念したいから、ユニテリアンからうけていた分だけ報酬を増してもらいたいといつて請求してきたというのである。

こゝにおいて、義塾とユニテリアンとの關係の濃さが一層世間に喧傳されるに至つたのも必ずしも無理ではあるまい。いな、世間といわず、塾内にも當時それを信じて疑われないものが間々いたくらいである。例えば、元慶應義塾長林毅陸等と同窓で明治二十五年（七月）塾（正科）を卒業した眞宗の僧西原眞月（舊名、民丸）——その憶い出を骨子に、子息寺本芳香氏がつづつたというパンフレット「福澤先生秘史」には

數多い人の中には、福澤はユニテリアンである、といふた人もある。云々（同書、一五頁）

と語られ、さらに當時のドイツ語教員向軍治は、「慶應義塾基督教青年會三十年史」（三九―四四頁）所載の追懷の冒頭で、こう言明している。

世間では福澤先生は宗教の事に關しては不關焉の方だと誤解して居るが、先生は決して非宗教的な方ではない。先生の御考えは慶應を綜合大學にして、經法文等の他に神學部を置かうとされた。その神學部にはユニテリアンを充て、芝園橋の唯（惟）一館をユニバーシティー・エキステンションとなす意思を持つて居られた。云々（同書、三九頁）

いずれも、福澤とナップとの親交の深さ、ひいてはユニテリアンとの關係の親密さを裏書きするといつて過言であるま

い。それに、他方塾生中にもこの運動に共鳴して、同協會に出入していたものがしばしばあつたようである。いま、その一例を當時の「ゆにてりあん協會彙報」から拾えば、雑誌「ゆにてりあん」第十三號（明治二十四年三月刊）に、義塾大學生のうちの或る一人の熱心家が前年冬の休暇中、郷里群馬に歸省して同地方有爲の人士に盡くユニテリアン教を吹聴したので、昨今上州磯部邊からまで求道の士が續々やつてくるといつて、それを證する通信文の拔萃が載つたりしているし、年代はすこし下るが、後述の高橋誠一郎氏の談話にも、半ばひやかしがてらにもせよ、同氏等もまたユニテリアン會員になつていたことがあつたと語られてもいる。

いずれ次節にも述べる機會があるが、ナップはその後、ユニテリアン派神學校を卒えた神田佐一郎等と共に東京、芝、三田四國町にユニテリアン協會を設け、米英のユニテリアン教徒によつて、そこに建てられた廣くて便利な教團本部、「惟一館」(Unity Hall)に據り活潑な宗教活動を行つていたし、その機關誌「ゆにてりあん」の發行所「惟一社」なども、事務所をあちこち數回移轉しているが、概ね麻布飯倉とか芝四國町のような慶應義塾に相當近いところにそれがあり、殊に同教の會館「惟一館」は實に芝園橋の袂にあつたという。したがつて、主義も主義だが、一つには同協會の所在地の關係からも、ごく軽い氣持でそこに出入りしていた塾生達だつて或はいたかも知れないのである。そんなこんなで、世間に福澤がユニテリアンびいきだとか、慶應義塾がユニテリアンと提携したとか傳えられたというのも、たしかに、あながち不當だとばかりもいえないようだ。

しかし、こゝに考えておかねばならぬことは、こうした世評との相關關係における福澤自身の眞の氣持でなければならぬまい。即ち、果して福澤がユニテリアンびいきなるが故に、その大學部設置にあたつて、ユニテリアンを奉ずる前記

三教授を迎えるに至つたのか、それとも、たまたまこの三教授がユニテリアンであつたがために、福澤自身がユニテリアンびいきと世間にみなされたものかという點である。

それについて、わたくしはこう考えたい。福澤が生來、宗教には至つて淡泊で一向かまわぬながら、それでいて往々、一見とかくユニテリアンに好意的であつたかの様子がうかがわれ、少くとも世間はそれを揚言し、なかには慶應義塾關係者中にもそう信じこむものが出で、特にユニテリアン側ではそれを深く感謝して疑わなかつたという事は、既にこれまで述べてきた通りである。事實、その限りでは、福澤がユニテリアンに好意を持つていたことは疑えないであらう、けれども、福澤の性格から推して、かれは決して一宗一派に傾倒して全面的にこれを支持するという人ではない。もちろん、福澤の念願としていた民心を和けて良き社會をつくり出すという經世上の必要に基ずく後援という意味でなら、ユニテリアンもまた福澤の支援を得てちつとも不思議はない筈である。その點では、ユニテリアンこそ、いわば他のいかなる宗派よりも福澤の志向に適つていたといえないこともないと思う。とりわけ、ユニテリアンの傳來は、福澤がその反キリスト教的態度をさらりとすて、むしろそれに傾くようになってからのことなのであつた。だが、それだからといつて、これが直ちに、福澤又は慶應義塾とユニテリアンとの提携とまで解するにはあたるまい。それでは、話がやゝ飛躍しすぎはしまいか。殊に右の三教授招聘問題などは、充分その間の事情を勘考してみれば、よくそれがわかるような氣がする。本節のはじめのこれに對するナップの辯明も、こゝにその意義が一層はつきりしてくるのではあるまいか。ナップの世話は出来るだけする、その代りかれの斡旋で義塾の發展も考える、福澤にすれば、むしろこのことは、いわゆるギブ・アンド・テークでしかなかつたのかも知れないのだ。そうでなければ、招聘教授の給與の件で悶着

するのも解せないではないか。前節に掲げたマコーレーの一文にみる「時事新報」との提携云々にしたつて、その感が全然ないではあるまい。時代は多少ずれるが、明治三十一年五月一日に入塾された高橋誠一郎氏は前記昭和二十七年三月七日座談會で、塾とユニテリアンとの關係についての問に對し、「關連はないと思います。」「思想的に繋がりはないと思います。」と言明され、そもそもユニテリアンはごく自由な考えを持つている人達の寄りあいで、思想的にはそもそもまつていなかつたように思われるし、もし強いていうなら、マコーレーの關係で「われ／＼にも會員になれといつて、いくらだつたか、十錢出して雑誌を一冊づつもらう、それで入つても損はないからというのでわれ／＼は入つた。日曜毎に演說會がありますから、島田三郎とか、村井知至、安部磯雄とかいう名士の話が聞けるのでみな聞きに行つたものです。」と往時を追懷されていた。一方には、こんな見方もあつたのだ。

ただ、ナップの紹介で右の三教授を得ることが出来、ために慶應義塾の陣容が大いに精彩を放つに至つたのはあくまで事實であつた。そののみか、爾來ハーバードと義塾との關係が急にひらけたことは、まさに特筆に價しよう。つまり、三教授のうち、リスカムだけはブラウン大學出身であつたが、ドロップス、ウイグモアの二人は共にハーバード大學の出身なのであつた。これをもつて、從來、これら三教授の招聘については、ただ單に、ハーバード大學より招聘したとか(「福澤諭吉傳」第三卷、五八〇頁、「慶應義塾七十五年史」、一六四頁)、同大學總長ジョージ・エリオットに依頼したとか(「慶應義塾五十年史」、一六八―九頁)いわれているにすぎないが、そこにナップの介在していたことを逸してはならないのである。そして、この後における下記のような兩大學の關係は、實にこれが端緒となつて生じたものとみて差支えあるまいし、爾後の同大學エリオット總長との直接交渉の途もこゝにこそひらかれたといえよう。即ち、引續き間もなく義塾

大學部法律科教師に就任することになつたらしいアレキサンダー・チゾン（これは東京帝國大學法科大學に本務があつた）だの、ドロップパースの後任として明治三十二年來任したヴィッカーズも同じくハーバード出身なら、その前年明治三十一年五月には、有名なかの提督ペルリの従孫にあたるトーマス・サージエント・ペルリが、同大學總長エリオットの推薦で文學科主任教師として着任しているし、他方、やがて塾出身者にして同大學に留學するものも出た。（池田成彬など、その顯著な一例で、明治二十一年七月別科を卒業、すゝんで大學部理財科に入つたが、中退して二十三年渡米、ハーバード大學のスカラシップをもつて留學したのであつた。）下つて、さきに昭和十一年同大學三百年記念式に際しては、日本の大學を代表して、時の慶應義塾長小泉信三氏が招かれ参列したのはまだ記憶も新しいことであり、戦後は戦後で、昭和二十三年十月からと、翌二十四年六月からと二度にわたり、同大學の好意による數回のハーバード講座が開かれた。さればこそ、後述するように明治二十三年十一月、ナツプの歸國にあたり、義塾は特に記念品を贈つてかれに報いているのである。義塾は明治二十三年十一月十四日、ナツプ歸國の二十九日（次節参照）に先立つ半月、第一期第十三回評議員會で「第七、ナツプ氏近々歸國ニ付報酬ノ事」なる議題をかけ、「本項ハ三拾圓乃至五拾圓位ノ物品ヲ贈ル事ニ決議ス」という次第なのであつた。

四、ナツプの活躍及び福澤との親交

ナツプは明治二十年十一月六日、ボストンはセブンド　チョーイチにおける盛大な送別會に送られ、同月三十日太平洋郵船ベルジック號に搭じてサンフランシスコを發し、途中海上不隱のため延着して翌十二月二十一日横濱着港、はじめ

てユニテリアンの代表者として來朝した。このことは一節に既述の通りである。そして、時恰も矢野文雄の紹介によりわが國內にその共鳴者を起しつゝあつた状況下、加えて時の指導的勢力を擔う福澤及びその一黨の庇護をうけ、大いに宣教の効をあげた。これまた、さきと同節及び二節にわたつて記したところである。

福澤は、「愛兒への手紙」をみると、その書翰八七（明治二十年十月十三日附、一太郎宛）に

九月十二日附の來書致披見候。桃介はタンマルアカデミーへ參候よし。今度ユニテリアンの僧にてナップと申人日本へ參候に付、其出發前、日本の言語風俗を取調度に付、貴様が其家へ參るべきよし。是れは面白き事なり。何卒相談の出來候様致度所祈候。現今日本に在る宣教師等も、其布教の方法には殆んど困却致し居候よし。是れまでも隨分本國の金をば費したることならんれども、其金丈けの功能はなき様に相見へ候。（同書、一八九一―一九〇頁）

と書いて、相見るまえから、暗にナップの布教上の効果に心を配つており、他方、明治二十年十二月十六日附「時事新報」に掲載された送別會記事（一節参照）中の挨拶のなかで、ナップは

（前略）余は年來成るべき丈け今、余が行かんとする所の國人と眞情を以て交際せんことを勉め幸ひ前の日本の若紳士を我家に同居せしむるの榮を得たりこの紳士は日本のホールレースマン（米國有名の教育家）とも云ふべき有名な教育家の令息にして余はこの忘年の友より切磋の益を得たることに實に少なからざりし中にも余はその忠告により日本に行て余が信仰を人に説く前に先づ自ら變宗者とならざるべからざることを知れり云々

といつて、「曾て我家に寓したる日本の若紳士（福澤先生の長男一太郎氏を云ふ）」により、日本へ行つてからの布教上の注意までをこまごまとうけたことを語つてゐる。しかも、これはそのまゝ二節に述べたキリスト教布教の法に關する

福澤自身の勸告を思わせるものであり、同節記載の明治十七年五月十二日附一太郎宛書翰などから察して、多分にこれ福澤自身の論旨でもありはしなかつたらうか。つまり、福澤は布教上の點で、出發前のナップにはやくも間接的に影響を與えていたことになるわけで、同様、同席での次男捨次郎の演説が、やはり從來の宣教師のいかにもおしつけがましい布教を批判したものであつた。そして、右書所收の書翰九二（明治二十年十二月十九日附、一太郎宛）にうかがうようにユニテリアンを慶應義塾に云々といつた一太郎の申越が、果してどれだけ福澤を動かすに役立つたか、おそらくあまり期待はされないけれど、それはとにかく、米國留學中の二兒を通じ、こうして夙にナップを知つていた福澤はその日本語教師の斡旋、住居の周旋に至る私事にまで一切かれの世話を惜しまなかつた。

その間の事情は「愛兒への手紙」が實によくこれを物語つていて、一部は既に一節に述べたところであるが、日本語教師については、同書の書翰八九、九七、一〇〇等によつて、一太郎からの依頼で慶應義塾の卒業生足田なるものを明治二十二年一月二十三日から横濱へ遣わしたことがわかる。因みに、この足田（匹田とも書かれている）について、右書の註はその名を未だ詳かにしないといつてゐるが、これは同二十年十二月に正科を卒業した三重縣出身の塾員足（匹）田倍吉かと思われる。それは當時義塾に入つた匹田姓のものは、入門帳によると、明治十五年九月三十日入社 of 匹田徳太郎、同十六年五月一日入社 of 匹田倍吉、同十八年十二月一日入社 of 足田鎮平の三名で、そのうち卒業生名簿に出てくるのは右の足田倍吉一人だけであるからだ。この足田は明治元年七月二日の生れで、このとき二十歳、のち後藤と改姓したというが、早く死んだものか、その後のことはよくわかつていない。それから、住居の件は同書の書翰九一、九四、九七、九九、一〇〇等にみられ、福澤はナップのために、その來着に先立ち、前以て三田小山町に一軒を探してみたり、

ナップ等がさしあたり一應横濱に落着いた後も、逐一これを在米の一太郎に連絡して、ナップはどうもフェネローザの世話で大學の近傍本郷邊に住もうとしている様子だとか、それならば無理にこちらから世話することもないと思うだとか、委細報じているかと思えば、結局は三光坂の大鳥圭介の屋敷を借りて三月はじめそれにナップが引移ることになり、ついでには居留地外の住居だということで、表面かれを慶應義塾の教師に傭入れたといつた名義にして願書を出してやつたり、まことに至れり盡せりの世話ぶりといわねばなるまい。

ナップの借りた大鳥の屋敷については後に翌明治二十二年八月十日附捨次郎宛書翰（「續福澤全集」第六卷、六五七頁）及び同九月二十六日附益田英次宛書翰（同、五七〇—一頁）に「三光坂大鳥の屋敷（壹萬坪に家二つあり）三萬五千圓にて三井に買取候福澤の地面も壹萬坪向ひに在り云々」「大阪滯留中留宅より別紙ナップ氏の來狀を送り參候に付御覽被下度書中大鳥氏の家の事あり右は過日屋敷地共々或人（三井とも云ふ交詢社の木原へ御尋被下相分り候義に御座候）え讓渡候様子に付或は家の借用も出來可申哉に存候何卒御試可被下候云々」などとみられ、相當の家であることが知られよう。福澤一家は明治二十一年五月四日、シモンズを相客として家中そろつてこれに招かれ、面白く一夕を消し、食後にはマデカランタルン（幻燈）を見物したりして、夜十時頃まで遊んで歸つたという（前掲書、書翰一〇五）。一節に述べた一月十三日の福澤の招待と思ひ合せれば、福澤とナップとの親交は、こうしてお互いに招いたり招かれたり、私交においてもかなり親密な往來のあつたことがしのばれるではないか。その上、「ミストルナップえ渡すべき英文儘に落手、右手紙到着の丁度其時に、ナップ氏は宅へ來訪中にて直に手渡致し、云々」（同、書翰九七）「宗教論を新聞紙に投書致候よしにて、其紙はナップ氏より請取、唯今翻譯中なり。云々」（同、書翰一〇六）といつた具合に、他にも、これを裏付

ける資料は種々ある。(また、ごく最近、慶應義塾大學佛教青年會の機關誌「いづみ」第三卷、第二號—昭和二十八年九月刊—に寄せられた義塾大學名譽教授川合貞一氏の「福澤先生と信仰」には「(前畧) ユニテリアンの最初の駐日牧師ナップ師などは三田山上に住居し常に先生(福澤)と往來していた。」(同書、二頁)と書かれているが、その詳細はわからない。)

ナップの活動は、こうしたなかで、來朝の翌明治二十一年の四月十五日、交詢社における講演(二節に既記)をはじめとして、かなり目覚ましくすゝめられた。その上、時は條約改正をめざす政府が苦肉の策として専ら歐化主義を採り、いわゆる鹿鳴館時代などを現出して程遠からぬころのことでもあり、ナップにとつては好條件がまず揃つていたといえよう。そして、翌二十二年二月十一日の憲法發布により、やつと信教の自由が公式に認められて間もなく、五月には一旦故國に歸つて、日本における布教についての報告を、ボストンのトレモント、テンプルで催されたユニテリアンの第六十四回大會で行つている(「六合雜誌」第七號、明治二十二年十一月刊、四一頁、「日本基督教會史」二一〇—一頁)。それによれば、ナップはかれ自身の努力の結果が福音主義の宣教師に比して殆ど百倍の効を収めたことを述べ、以て將來の希望に及んだといわれ、大いに氣陷を吐いたようである。尤も、このナップの報告に對してはアメリカン ボールドの派遣宣教師オチス、ケレー(Otis Cary. 「日本基督教會史」—A History of Christianity in Japan. 2 Vols. 1909. の著者)が統計と事實とを掲げて福音主義教會の日本における傳道の成跡を叙述してナップの説を訂正しているというが、なんといつても、最初のユニテリアン宣教師としてのナップの功は争えまい。石井研堂編著「増訂明治事物起原」の「日本ゆにてりあん」の項にも「矢野文雄、報知新聞紙上にて、ゆにてりあん教義の日本に採用すべきを論じたる後ち間もなく、明治二

十年春（實際は十二月）、米國ゆにてりあんのナップ氏渡來して傳道を始め、同二十三年には、同教機關雜誌ユニテリアン出でたり、之を日本に於けるゆにてりあん教の始めとす。（同書、一五四頁）と記してある。また、このとき慶應義塾のために三教師斡旋の勞をとり、かれらを伴つて、同年十月三日アメリカを發ち、二十二日再來したことは前節に述べた。その折、かれが數十名の共働者を伴つて再來すると或る新聞に傳えられた（雜誌「眞理」第一號、明治二十二年十月刊、四五頁）というのは、思うにこれら三教授一行や同僚マコーレー等を含む多數の同行者をめぐる誇張された風評であつたかも知れない。それにしても、ナップの力が相當重視されていたことはうかがえよう。

再來後のナップは、明治二十三年三月一日を以て、敢然、機關誌「ゆにてりあん」（後「宗教」と改む）を發刊し、神田佐一郎、佐治實然等と共にユニテリアン協會を組織して、いよいよその趣旨宣布に盡粹した。福澤がすゝんで同誌創刊號のために一文を投じていることは既に記した（二節参照）。H・リッターの「日本キリスト新教傳道史」（英譯本、三一九頁）によると、東京、芝、四國町に建てられた「惟一館」（Unity Hall）では、毎週日本人の間で禮拜式が行われ、同館の室々は日本ユニテリアン協會（the Japan Unitarian Association）の役員達のためにそれぞれ區切られ、郵便による傳道や雜誌「宗教」の編集等のためにも事務室や貯藏室やがわけられて、なかなかさかんであつたらしい。自由神學校の後身、先進學院の學科課程も年々九ヶ月にわたつてこゝで開かれていたという。また、ドイツの普及福音派の機關雜誌、前掲の「眞理」第十號（明治二十三年七月刊）には、

ユニテリアン教會の運動 は如何なる効果あるや知らねど兎に角活潑に進みつゝあるなり聞く同教會は讚美歌の編纂に着手せりと吾人之れを聞て頗ぶる欣ぶ在來の讚美歌は歐文を其まゝ反譯して無理やりに樂譜と合せしものか然ら

ざるも石を嚙り藁を食ふが如きもの多かりしが如し同教會にして此一大事業を成就せんと欲せば慎んで前轍を蹈ざらん事を望む（同誌、四三頁）

といった記事などもみられる。そして、當時「ゆにてりあん」に寄せたナップの論稿は實に左の九編に及んでいる。

ユニテリアン教は一の社會力なり（一號所載論說）

慶應義塾とユニテリアン教徒（一號所載雜錄）——前節にこの全文を紹介しておいた——

ユニテリアン教の體制（二號所載論說）

惟一俱樂部（三號所載論說）

ユニテリアン教は單純にして正面的の宗教なり（四號所載論說）

ユニテリアン教と佛教との類似及差別（五號所載論說）

ユニテリアン禮拜の方式（七號所載論說）

ユニテリアン教の歴史、主義、及勢力（九號所載論說）

ユニテリアン教の歴史、主義、及勢力、第二主義（十三號所載論說）

この他、ナップの活動は、例えば、これまた後にはユニテリアンの機關誌となつたという「六合雜誌」に書状を送つて（同誌第一一八號、明治二十三年十月刊、三三—三五頁所載）、かれの論文を批評した同誌前號（明治二十三年九月刊、一一—五頁）所載の高橋五郎の評論「ユニテリアン教と佛教との同盟」（これによると、ナップは日本人の間にユニテリアンを紹介するため、かれらを鹿鳴館に招いて饗宴したりもしている。）に對し抗論しているのなどにも、その熱心さがうかがわれるが、明治二十三年

十一月遂に病を得て後事をクレイ、マコーレーに托し歸國するの止むなきに至つた。「ゆにてりあん」第九、十、十一號所載の「日本ユニテリアン教(協)會彙報」によると、ナップは所用を帯びて同月二十九日日本を發ち、兩三ヶ月フランスに滞在してから故國に歸つたらしく、その「日本を去りたるは病氣の爲め醫者の勧めに依るものなり」(同誌第十一號、明治二十四年一月刊、三一頁)ともいう。前節既述の慶應義塾がかれのために三拾圓乃至五拾圓の贈品を決議したのはこのときのこと他にならぬ。

ついで、その後のナップは如何というに、これは少しく消息を缺くが、數年を経た明治三十一年五月十六日の福澤邸の圓遊會には父子そろつて出席している記録があるし(「慶應義塾學報」第四號、明治三十一年六月刊、七一頁)、同年七月十日發行の「慶應義塾學報」第五號(二一―四頁)には「日本の地震」と題するかれの論説が掲載されており、このころ三度來日していたことは間違ひあるまい。序でながら、子息のイー・テー・ナップは右誌第四號(七四頁)や義塾保存の書類(明治三十年五月十四日―第四期第十四回、同年十月十六日―第五期第一回、翌三十一年六月九日―第五期第五回評議員決議録)によると、明治三十年五月十四日義塾普通部英語學教授を囑托せられ、同三十年十月十六日辭任、さらに翌三十一年五月四日には高等學科英語學の教授を擔任したりしていた。(前節記載の福澤大四郎氏は、このナップに直接教えをうけられたことがあるそうだ。)

それに、こゝで参考までに一言しておきたいのは、ユニテリアンのその後がどうなつたかということだが、こゝには、便宜、「植村正久と其の時代」第五卷及び「日本基督教史要」等の記事を借用して、かりに責をふさいでおこう。前者は同書が、さきに掲げた「六合雜誌」第一一八號(明治二十三年十月刊)所載の「ナップの來狀」全文を引用したあとで

附した「註」の部分であり、後者はその第八章闘争時代及び第九章新興時代等に散見するユニテリアン関係記事の抜萃である。一應簡潔にそれを語つていふと思ふ。

因に、ユニテリアンは、當時の知識階級に歓迎せられ、福澤諭吉、加藤弘之、矢野文雄、杉浦重剛と言つたやうな毛色の變つた人々もこれをこそと賛成したものである。後芝園橋の袂に會館を建て、惟式館と命名し、雑誌『ゆにてりや(あ)ん』を發行し、神學校をも設け(楚人冠杉村廣太郎はその卒業生の一人である)等、一時はすばらしい勢であつたが、後年其の集會所が我國に於ける労働運動の本部(鈴木文治による友愛会の本部)になりたるやうに、神田佐一郎一派の基督教的ユニテリアンと、佐治實然一派の佛敎的ユニテリアンの分裂にからんで、香ばしからぬ問題もまとわり、ユニテリアンは全然その姿を消してしまつた。(「植村正久と其の時代」第五卷、一〇七—八頁)

ナップは、雑誌『ゆにてりあん』を發行し、正統派基督敎に挑戦すると共に、ユニテリアン主義を力説し、佛敎の理的なるを推賞した。後に、米國のユニテリアン派神學校を卒へた神田佐一郎が歸朝して、ナップと共に芝區三田四國町にユニテリアン協會を設け、(明治)三十五年には會て東本願寺派僧侶なりし佐治實然が、これに参加して活動し、次いで村井知至、安部磯雄、平井金三、岸本能武太、廣井辰太郎、黒岩周六、三並良らが加はり、普及福音派と相双んで、自由派基督敎が抬頭するに至つた。従來の基督敎會の人人は、正統派神學のほか殆ど知らなかつたから、自由派基督敎の論鋒に對して、初めは驚異し、次いで甚だ狼狽した。云々(「日本基督敎史要」、一五六頁)

會て自由民権運動と縁故深かりし基督敎は、(明治)三十年頃から社會主義と交渉するに至つた。三十一年、ユニテリアン協會の村井知至は『社會主義』を著したが、同年社會主義研究會を起して自ら會長となり、岸本能武太、安部磯

雄、佐治實然の如きユニテリアン系基督信徒が會員となり、異分子として幸徳秋水や杉村廣太郎が加はつた。云々

(同書、一六二頁)

明治四十四年秋、内ヶ崎作三郎は英國留學より歸り、ユニテリアン協會の牧師に就任して、翌年一月同會を統一基督教會と改稱して、所謂自由基督教運動を起し、『六合雜誌』も新装されて、自由基督教の筆陣として廣く行はれるに至つた。この宗教運動に對して、從來からユニテリアン協會に出入した安部磯雄、三並良の外に、岡田哲藏、武田芳三郎、加藤一夫、鈴木文治、内藤濯、岸本能武太、小山東助、今岡信一良、吉田絃二郎、野村隈畔、遅れて沖野岩三郎らが援助して、芝園橋畔の惟一館は、大正七年頃まで、自由基督教の牙城を築いてゐた。然し明治末期に、鈴木文治が同館の一室にて起した労働運動は日を追うて擴大し、初め數十名を會員とした友愛會は、數年ならずして日本労働總同盟の大團結を見るに至り、統一基督教會が瓦解して後、惟一館は總同盟の本部として世の視聽を集めた。云々

(同書、一七四―五頁)

こうして、後には實際社會運動と結びついていつたユニテリアン、それに對して福澤はどんな態度をみせたらうか。それは、福澤が明治三十一年九月二十六日腦溢血症の大患に倒れ、同三十四年二月三日死去しているので、遺憾ながら知ることが出来ない。しかし、前節の高橋誠一郎氏談話からも察せられるように、福澤或は慶應義塾のユニテリアンに對する關係も、年と共に次第にうすらいでいたのではなかつたかと思われる。

さて、最後に、興味あるナップの著書の一つ披露したい。これは「福澤諭吉傳」にも記されなかつたものなので、少しく詳細に紹介しておこう。一八九七年(明治三十年)ボストンで出版された日本に關する著書で、書名は

Knapp, A. M.; Feudal and Modern Japan. Boston, 1897.

といい、縦約一四纏、横約一〇纏の小型本で二冊からなっている。卷一は本文二三四頁、口繪共一三葉の寫眞を含み、卷二は本文一八六頁と寫眞が口繪共一二葉、あとビブリオグラフィが二二六頁まであり、全卷十三章に及ぶ。表紙は金文字でかざられ、鳳凰を圓型に圖案化した模様をあしらひ、天金で、ちよつとした豪華本である。白い表紙の右下隅に本人の署名でもあるのか、日本人らしからぬ手蹟で「アサ、メイ、ナップ著」とみられるのが面白い。内容は一言にしていえば、日本の傳統、風俗、習慣等を説いたものといつてよく、これはナップがかねて來日に際し希つていたところなのであつた。一節に引用した明治二十一年一月十五日附「時事新報」所載の「福澤先生の晚餐會」なる記事中に「同氏（ナップ）は日本の國風民俗を知悉して國の土産になさんとは豫ての素望云々」とある、それが達成されたものとみていゝであらう。ところで、この書の卷一、扉の次の一葉に次のような記載がある。

TO

FUKUZAWA YUKICHI

IN GRATEFUL RECOGNITION

OF HOSPITALITY

滯日中の福澤の厚遇を感謝しての献題で、この本を福澤に捧げるというわけだ。福澤とナップとの親交を示す一資料としていさゝか話柄を提供するものではあるまいか。この本はナップから署名入りで福澤に贈られ、巻頭白紙二葉目に「Mr. Fukuzawa Yukichi— with regards of— Arthur May Knapp.」と三行にサインのあるものが一部、慶應義塾

史編纂所に所藏されている。ナップ三度目の來日に際し齎らされたものでもあろうか。また、同義塾圖書館には同年刊の再版本が星文庫中に收められている。再版本は初版本よりほんの僅かに細長い型で、寫眞が省かれ、裝釘が全く異なる。背だけを鼠色クロス、あとは茶かつ色の格子縞様の紙で、全體に紙質もはるかに劣る。或は、右の初版本は特に福澤に贈るための上製本であつたのかも知れない。とにかく、一八九七年（明治三十年）といえ、再版本舊藏者の星亨の暗殺にあつた四年前、表紙裏に丸善のラベルがはつたまゝになつてゐるところから推して、そこから購入したものか。それにしても、同年内に再版本まで出て、こうしてわが國に渡つてきてゐるのをみれば、この著書はかなり讀まれたものと想像され、その後明治三十三年北清事變の勃發するに及び、その余慶をうけて、さらに重版されたらしい。同年九月十日發行の「慶應義塾學報」第三十一號雜報欄には、「日本に關したるナップ氏の著書」と題してこんな記事が出てゐる。

北清事件暴發してより、世界の耳目は齊しく東西に集注するに至り、隨つて英國等にも、出版業者は争ふて日清等東洋諸國に關したる著書を上梓せんとしつゝあるが、久しく我邦に在任せしアーサー・メイ・ナップ氏は今度倫敦ダックワルス書店より『封建時代之日本』ヒュイクル・エンド・モクラン・ジャパンと題する書冊を發行する由、云々（同書、六七頁）

なお、序でに申添えておくが、右の引用文の「久しく我邦に在任せしアーサー・メイ・ナップ氏は」の字句から察すれば、當時ナップは既にわが國にはなく、明治三十一年五月の圓遊會以後、この間に日本を去つたものと推定されよう。福澤と交遊のあつた外人中に、こうして十年近く親交を結び、しかもその恩顧を深く感じていたナップのいたことも忘れてはなるまい。

むすび

以上、アメリカ、ユニテリアン派の最初の來朝宣教師アーサー・メイ・ナップと福澤諭吉との關係につき、四節にわたつて述べてきた。少しく冗漫にわたつたきらいがないでもないが、要するに、このやうなものである。

福澤は、かれ個人としては、幼少のところから宗教というものに對しては極めて關心のうすい方であつたけれども、これが經世上の効用については充分みとめて、社會の指導者として常々大いに考慮するところがあつた。そして、特にキリスト教に對しては、國權擁護の意味から、はじめはこの外教にひどく攻撃的立場をとつていたが、やがて世情の進展に伴い、明治十七年ごろから、むしろこれを積極的に受容するやうになつてきた。折しも、アメリカ留學中の愛兒を通じて知己を得たナップの來朝があり、兩者互に親交を結んで、福澤は大いにナップの布教を支援し、他方ナップには自分の經營する慶應義塾の發展のために或る種の助力をうけ、かくして、兩者の關係は一段と緊密の度を増した。こゝに、世間はユニテリアンと慶應義塾との提携を問題にし、ひいては福澤はユニテリアンなりと評されるにまで至つた。しかし、福澤にしてみれば、自らしばしば言明しているやうに、個人としては決していかなる宗教をもならん必要とはしなかつた。ユニテリアンとて、もちろん、この例に洩れまい。ただ、福澤が一般庶民の道德的向上に資する宗教の發達を生涯の念願としていたのはたしかな事実で、その場合、たとえ何宗何派を問わないとはいふものゝ、やはりこのユニテリアンなど、最もよく、福澤の好みというか、本來の感情にかなつたものではなかつたのか。そんな氣がするのである。

少くとも、個人的關係においては、福澤とナップとの交遊はかなり深いものであつたし、慶應義塾またナップにやさか援助をうけるところがあつたといふべきであらう。

追記

一、三節に記したマコーレーの慶應義塾教師云々の件は、福澤の三男三八氏の語るところ(雜誌「塾友」一六號所載「福澤諭吉を語る」)では、明らかに教師をしていたようにいわれ、しかも、マコーレーはシモンズ、金玉均とならんで、福澤の最も懇意にしていた外人の一人であつたそうである。また、そういえば、たしかな由緒は知らないが、義塾内萬來舎の庭園に「クレー・マコーレー氏記念燈」と呼ばれる石燈籠一基のあつたことを憶う。義塾とマコーレーとの關係をうかがう一助ともなろうか。

二、同じく三節末の義塾とハーバードとの關係を語る一挿話としては、義塾圖書館東側の同大學名譽總長エリオット博士による記念植樹などもあげられて然るべきであらう。博士が明治四十五年六月來塾された折のもので、詳細は當時の「慶應義塾學報」第一八〇號(明治四十五年七月刊)に報ぜられ、義塾の「評議員決議録」(第二號)にも同博士歡迎のための費用に關する議決がみられる。實際には、今日、どの樹がそれであるかよく知らないが、次のように刻んだ丸い石がいまでも植込みの小高いところに横わつている。

Planted by Dr. CHAS. W. ELIOT of Harvard University June 29th 1912

エリオット博士は六月二十六日來塾(右の植樹碑に二十九日とあるのと相違するは何故か)、非常な歡迎をうけ、新築の圖書館はじめ塾内を參觀して、後福澤家別邸の午餐會に望んだ。それらの模様を傳えた寫眞や記事、このときの三田演

説館における博士の講演「現代の大學教育の影響」など、共に前記「慶應義塾學報」に載っている。

さらに、ハーバード大學出身であつて義塾の教授となつてきたものとしては、明治四十一年四月着任のW・W・マックラレンや、ヴィッカーズ後任として明治四十四年八月着任のロバート・ジャクソン・レー等以下引續き、なお數名に及ぶが、それらの詳細については他日にゆずらう。

三、また、四節にナップの日本語教師匹用倍吉のことを書いて、後年の消息が不明なまゝ、或は早く死んだのではないかと述べておいたが、その後眼にふれた「慶應義塾塾員履歷集」(西澤喜四郎編、明治二十七年四月刊)によると、かれは卒業後ナップについて語學を修め、明治二十一年十月から同二十三年七月迄は東京三井銀行に在勤、同年十一月後藤仁兵衛の養子となつたと。「ナップに就て語學を修め」というのは、つまり、匹田はナップに日本語を、その代りナップからも語學を教わるといつた次第であつたのだらう。そして、爾來養家の業務、米穀肥料問屋及び醬油醸造業に従事し、二十六年には株式會社米穀取引所創業の事務を掌つて、開業後その支配人になつたという。この他、福澤家保存資料のうちからは、裏面に「後藤倍吾」と署名のある肖像寫眞一葉を見出した。鬚をたくわえたフロックコート姿のもので、これによれば早死の推測は當然誤りといわねばならないようである。

四、それから、ナップの來日は明治二十年十二月二十一日を第一回として、同二十二年五月三日一時歸國し、同年十月二十二日再來、翌二十三年十一月二十九日また歸國。そして、明治三十年頃三度來日したかの如く本文に認めておいたが、「時事新報」第三八〇九號(明治二十六年十一月十日附)雜報欄所載の「ナップ氏の爲めに妄を辯ず」なるものをみると、當時二三の新聞に、ナップがロンドンで骨董商賣を始めたといつた記事が載つたのに對し、クレイ・マコ

レーがその妄を辯じていて、なかに「氏(ナップ)が今年の夏、日本に來りしは云々」とある。そうすると、明治二十六年夏にも一度ナップは來日していることになるわけであるから、三度というのは訂正されねばなるまい。ナップは、そのころ、アメリカはマサチューセッツ州フォール リヴァーにおける寺院を管督していたという。以上、追記補正しておく。

本稿を草するにあたって、東大法學部明治新聞雜誌文庫の西田長壽氏から「郵便報知新聞」及び雜誌「ゆにてりあん」、「六合雜誌」、「眞理」等閲覧の便を供された。こゝに記して、その御好意を謝しておきたい。また、その他の諸資料探索にあたっては、慶應義塾史編纂所の杉本治子氏に御協力を願つた點が少なくない。併せて、こゝに感謝する。

慶應義塾教員デニング

拙稿「宣教師ナップと福澤諭吉」の本文二一四及び二一六頁に一言したW・デニングについては、かつて「デニングの演説集」(本誌二六卷三・四號餘白録)とか「デニング英大使の父と福澤先生」(「新文明」四卷一號)といったものを別に書いたこともあるが、明治十七年二月四日附の「時事新報」雜報記事「慶應義塾維持員會」によると、當時かれが義塾に教鞭をとつていたことが知られる。そして明治十六年に入塾し恰かもこのころ塾生であり、のち福澤

の養子となつた桃介はこのデニングに教えをうけたものとみえ、「福澤桃介翁傳」(逸話篇、二五五頁)にこんな記事が出てゐる。當時のデニングの授業ぶりの一端がうかがえて面白いと思う。

慶應義塾の教師デニングの課題に對し、桃介氏がワン、ミニット、サウサンド、マイルスの汽車云々と答ふ。然るに數字で察めた西洋人は『左様な快速力のあるべき筈がない』と頭から否定したので得意の漢學流に白髮三千丈をまねた桃介氏大にしよげる。

(會田 倉吉)